

結論

本研究は、格闘技であるムエタイがなぜ倒すことを必要としないのかという疑問から出発した。この疑問に答えるため、ムエタイを取り巻くタイの文化とムエタイの変容が考察された。そして観客が行なう賭博がムエタイの変容を促したことを明らかにした。

第一章：タイは、元来賭博に寛容な国と言える。国民のほとんどが信仰する仏教も賭博を禁止していない。また、法律も基本的には賭博行為を禁止しているが、一定の条件下で賭博を認め、その結果、日常的に多くの場所で賭博が行なわれているという現実がある。こうした状況で伝統的な格闘技ムエタイも、単なるスポーツではなく、賭博の対象として扱われるようになっていく。実際に、現在のムエタイスタジアムは、スポーツ競技場としての側面を持つと同時に、賭博場の役割を果たしている。タイは貧富の格差の大きい国である。現在のムエタイを担う選手のほとんどが貧しい階層出身の少年であり、また、バンコクでムエタイを行っている選手の大半が最貧の東北地方から来た出稼ぎ選手か、その他の貧しい地方からきた少年である。ムエタイ選手を職業に選ぶ貧しい少年は後を絶たない。彼らが繰り広げる闘いがムエタイ賭博を支えている。

第二章：ムエタイは時代とともに変容してきた。武術として行なわれたムエタイ時に仏教的な理念と重なりあい、そして相手を制するための技については、打投蹴の他、関節技を含めた様々な技法が開発された。こうしたムエタイは、時に見世物としても行われたが、それは拳に紐を巻いて闘うムエカッチュアクという方法であった。文献によれば、スコートタイ王朝時代（1238～1377）からムエタイには賭博が行われていたとされる。

ムエカッチュアクには、現王朝の中期、ラーマ 5、6 世の時代（1868～1925）民族の主張すなわち、西欧に対して強く勇猛であると同時にタイ仏教の教えや伝統を大切にするという理念が伴ったと見られる。それは近代化するタイが軍国主義を標榜するところから勇敢な男性像を求めたからに他ならなかった。このようにして、近代化されたムエタイは、国民的なヒーローを生みだし、タイ全土に普及し隆盛を見る。勇猛なる格闘技という文化性は、相手を倒すための技法を磨き、タイ全土から猛者を集め強さを競いあう状況を生み出した。しかし、このような国民的なスポーツに発展したムエタイにも、賭博は伴っていた。この賭博がきっかけとなり、ムエタイはさらに変容しはじめたのである。

第三章：賭博性が増大し、ムエタイギャンブラーのための競技へと変容した。影響が大きかったのは賭け率を利用した賭博方法であった。賭け率を駆使して賭けるならば、勝敗が決定するまで損をしないように何度でも、また、いくらでも賭けることができる。どちらが勝つか負けるかという一度きりの賭けでは幸運に頼るしかないが、賭け率を利用すれば勝敗が決定する直前まで、ギャンブルを幾度も楽しむことができたのである。

このような賭け率を利用した賭博がスタジアム全体で行われるようになってから、ムエタイはギャンブルムエタイ化したと考えられる。ギャンブルムエタイ化は、1950 年代後半

から1970年代にかけてプロモーター制度の導入などをきっかけに少しずつ見られるようになった。ギャンブラーは徐々に増加し、1970年代後半にはギャンブラーがスタジアムの観客の大半を占めるようになったと見られる。さらに、1980年代にはムエタイよりもサッカーなどに人気が奪われ、ムエタイスタジアムにはギャンブラーのみが残されたこともギャンブルムエタイ化に拍車をかけた。

現在のムエタイはギャンブラーの為のムエタイ興行といえる。ムエタイは、ギャンブルを可能にする文化装置でなければならなくなったのである。このようにギャンブラーによって支配されたムエタイは、それまではなかった変化を生み出すようになった。採点基準の大幅な変更や暗黙ルールの創出などである。これによって、選手の独特の闘い方や技法、勝負観が形成された。そして、ムエタイはプロ格闘技でありながら、「倒しあうことの必要のない格闘技」に変容したのである。相手を倒すというよりも身体資本（body capital）を傷つけないようにして勝つムエタイ文化が創造されたのである。

Fig.63 複雑に絡み合ったギャンブルムエタイの理念と技法の関係

